

会 議 録

会議の名称	平成26年度 第3回豊中市図書館協議会		
開催日時	平成27年(2015年)2月19日(火) 18時00分～20時00分		
開催場所	豊中市立高川図書館 会議室	公開の可否	㊦・不可・一部不可
事務局	読書振興課 岡町図書館	傍聴者数	2人
公開しなかった理由			
出席者	委員	松田 美和子 杉浦 公男 鶴川 まき 橘高 美那子 舟岡 直子 日下部 雅彦 斉藤 雅美 岸本 岳文 村上 泰子	
	事務局	足立教育次長 堀野岡町図書館長 北風千里図書館長 松井野畑図書館長 須藤庄内図書館長 大原岡町図書館主幹 島津岡町図書館副主幹 前川高川図書館長 中田岡町図書館副館長 西口岡町図書館副館長 永島岡町図書館主査	
	その他		
議題	1 豊中市立図書館中長期計画(豊中市立図書館グランドデザイン)の進行状況について 2 その他		
審議等の概要 (主な発言要旨)	別紙のとおり		

平成26年度（2014年度）第3回図書館協議会

日時：平成27年（2015年）2月19日（木）18時～20時

場所：豊中市立高川図書館 集会室

出席者：（敬称略）

委員 松田 杉浦 鶴川 橘高 舟岡 日下部 齊藤 村上 岸本（委員長）
事務局 足立 堀野 北風 松井 須藤 大原 島津 前川 中田 西口 永島

開会

資料確認

高川図書館館内見学

●委員長

今回で平成26年度最終、現委員が参加する最終の協議会となる。

豊中市では会議を公開しており、本日も傍聴人は2人。傍聴の定員は10名なので、希望者多数の場合、状況を見ながら私が判断させていただく。

傍聴の皆様にはアンケートをお願いし、伝えるべき内容については、委員の皆様にご報告させていただきます。

前回の会議録については事前送付されたものに、委員の皆様から特に意見はなかったので、発言者名は明記せず「委員」とし、概要という形で公表することをご了承いただきたい。

では議題に入らせていただく。

豊中市立図書館中長期計画、（*以下グランドデザインと表記）の進行状況。特に分館である高川図書館のあり方について、を議題とする。そのため、会議に先立って、庄内図書館須藤館長の案内で見学会を実施した。では、高川図書館のあり方についての説明をお願いする。

●事務局

分館、特に高川図書館のあり方について事務局から提案させていただく。

その前に高川図書館、および南部地域の特性について教育委員会が作成した資料を紹介し、続けて南部の動向に関わる南部コラボ基本構想の推進度合いの報告をさせていただきます。

その後、高川図書館前川館長の近隣の学校や保育所での聞き取り、高川図書館の現状、「（仮称）南部コラボセンター」（*以下南部コラボと表記）のサテライト化の一環として、次年度より実施予定のモデル事業の内容、さらに現在、図書館全職員が関わって検討を進めている分館のあり方の中で、高川図書館に関するもの、職員からの提案等を具体的に紹介させていただき、本会議の討議材料としていただきたいと思いますと考えている。

資料1「学校規模と通学区域に関する課題の解消に向けた基本方針と資料編」は教育委員会が昨年4月に作成、HPにて公開している。現在、豊中市では学校規模と通学区域の見直しを検討しており、その地域課題解消を図り教育環境の整備充実により児童生徒の学び育ちを尊重する教育を推進するための方向性として、豊中市学校教育審議会に諮問し、平成23年度は小中学校の適正規模と通学区域のあり

方、25年度には学校規模と通学区域の課題解消の具体的方策の方向性についての答申を得た。この答申を踏まえた上でのものが今回配布の基本方針であり、規模など学校教育の課題とともに南部地域の課題、南部地域の学校の現状にも触れているので今回の資料とした。

たとえば、本編5頁(1)地域ごとの検討課題では、南部地区において、生活課題や学習課題を抱えた児童・生徒が多いことが取り上げられており、それらの課題解消は(南部地区の公共施設の再構築を図る)南部コラボ構想の動きに合わせて検討することとなっている。資料編の図表5は平成25年度から31年度の学級数の現状と推移についての資料で、高川地区関連では小曾根、豊南、高川小学校が掲載され、31年度は掲載される全ての学校でクラス替え不可能な学年が存在することになる。

また、図表6「南部地区の生徒数、学級数の現状と推計」では、庄内中部西部よりやや緩やかながら、高川図書館隣接の第十二中学が、14クラスから12クラスへと少子高齢化の進行が予想される。

事前資料で配布した「道路整備に伴う居住者特性の変化の調査Ⅱ」は図書館で所蔵しているとよなか都市創造研究所の2014年3月の研究報告の一部抜粋である。7頁から地域の特性が書かれており、『都市計画マスタープラン』の地域区分によると、南部は名神高速道路以南と区分されていることがわかる。次の8頁ページでは南部地域の著しい人口減少、世帯内人数の少なさ、65歳以上の高齢者人口率の推計は平成32年度市平均26.9%のところ、南部地区では34.4%となっており、急速な高齢化が予測されている。

もう一点、「南部コラボ」構想の進捗状況について、報告をさせていただく。参考資料として南部地域活性化市民フォーラムのチラシを配布した。

11月19日には、「南部コラボ」構想推進会議第1回意見情報交換会。翌12月に第2回意見情報交換会、今年2月には第2回「南部コラボ」基本構想推進会議が開催された。

第1回意見情報交換会では子育て支援拠点機能の具体的内容の検討、担い手の検討として子育て支援センター保育士幼稚園教諭、地域社会福祉協議会会長、公民館子育て支援グループの行政及び地域の子育て支援に関わる市民が出席して話し合ったところ、子育て機能についての意見として、子育て支援の中身がよく見えない、支援を受けるための一歩がふみだせない、「子育て支援施設ほっぺ」のようなガラス張りで活動の様子が外からわかり、自分たちが入っていけそうな場が判断できる施設を希望する意見、土日、子どもと気軽に外に出て憩える場所や、子育てのしんどさを相談できる場所を希望する意見などがあつた。

第2回意見情報交換会では児童館機能および学力支援拠点について討議。こちらは教育総務室の企画チーム、小中学校PTA、児童館機能を持つ人権まちづくりセンター職員が参加し、図書館は、オブザーバーとして参加した。地域で学力支援活動をされる元校長の意見としては、地域活動を通して「負の再生産」があることを活動の中で感じるという意見や、子どもの居場所には保育士や社会福祉士等相談可能な専門職が必要、子どもが1人で行くのが可能な安全な場所にしてほしいという意見があつた。

今年2月6日の第2回「南部コラボ」基本構想推進会議では意見情報交換会の内容を共有後、学力向上地域学校連携拠点、子育て支援拠点、児童館拠点等の在り方、担い手について討議された。南部の子供人口の減少、小学校が分割されて中学に進学する仕組みの為、中学の1クラスに数人しか同じ小学校出身者がいない仕組みのあり方の影響で仲間作りに支障が出ているという情報提供もあつた。

現在、教育総務室企画チーム主催で「魅力ある学校づくりワークショップ」として小学校区ごと、南部地域も小中学校も再編したい意向があるとのこと。基礎学力に課題がある生徒が多いことから南部コラボができたところで全南部地域カバーは不可なためサテライト機能が必須であるという意見もあつ

た。

今後の南部コラボセンター基本構想推進会議の予定として、27年度は2回の意見情報交換会（テーマは高齢者、キャリア）、市民が参加できるラウンドテーブルを開催予定。図書館にかかわるラウンドテーブルについても実施予定。3月7日には南部地域活性化市民フォーラムとして南部コラボ構想の進捗状況、概要部分について説明がある。他都市先進事例の紹介では視察した塩尻市の「えんぱーく」も一部紹介される予定。

では、次に高川図書館前川館長から報告させていただく。

●事務局

高川図書館の立地は東に徒歩5分、約300メートル行くと吹田市。1キロ南の神埼川が大阪市との境となる。阪急庄内駅からは徒歩15分。隣接する吹田市とは平成23年度より広域利用サービスの試行を実施、吹田市民の利用は年間1400件。2700冊程度。

建物は占有床面積1200平米。蔵書9万冊。来館者は日平均約440人、貸出冊数約690冊。また複合施設でもあり1階には老人憩い施設、スポーツルーム。3階に介護デイサービス施設、社会福祉協議会がある。

高川図書館が南部コラボサテライトとして機能変更していくにあたって、昨年より南部コラボセンター構想推進会議事務局、庄内公民館と情報共有のための打ち合わせを行っている。

豊中南部地域は学習面のサポート、子育て支援が大きな地域課題であり、そのための事業として庄内公民館では8月に2日間、「大学生と勉強しよう」として学習サポートを行った。他に学力向上支援事業「日曜学習」が今年度15回行われた。子育て支援に関してはベビーマッサージ、マタニティヨガが実施され、目的として育児世代の母親に市の施設や行事に目を向けてもらうこと、のみならず利用者同士の交流、講師の助産師への育児相談の機会となり不安孤独感解消の狙いがあるのだ、とのこと。主催者側が利用者の声を聞く機会にもなっている。ベビーマッサージについては来年度5月より高川図書館でも行う予定。

地域カラーに関しては地域施設からの聞き取りを進めているので、報告させていただく。地域子育て支援センターでは訪問当日、5組の母親が集まっておられた。職員2名に話を伺ったところ、転勤や9月途中の転勤などの事情で誰からも支援されていない親子が多い、親子で自室にいる時間が多く孤立感の解消の為には、話せる場所が必要。専任職員が在籍しているので育児関連の質問に答えることで不安の解消につながる、図書館でもスペースを貸すだけでなく話し相手がいればよいのではないか。市HPでは市の行事等情報提供しているが、支援センターもチラシ等で情報提供に努めているが、外から見られないので入りづらさがあり、まず足を運んでもらうことが必要である。この場所でベビーマッサージは関心がたかいとのことだった。

当図書館の隣、高川小学校では校長教頭両先生に話を伺った。お話によると、学内調査では本好きな生徒の割合は多く、図書館行事の掲示が学内にあれば利用につながるのではないかと、最近の保護者の傾向はサロンよりも何かを教えてくれるものに積極的に参加するのを望むようだ。自習室利用は中学生が多いようだが夏休みの自由研究では小学生も使用するようだ。こういった内容だった。

また、図書館職員の意見としては実現可能かはともかく次のような意見があった。

飲食可能な利用者交流スペース、高齢者と子ども等の世代間交流スペース、静かな図書館とおしゃべりができる図書館の区別は必要、乳幼児連れの母親が子ども向け絵本と保護者向け育児本等を同時に見

られるような配架、地域課題としての学習スペースは夜まで開けないと無意味だが、管理が難しい。新聞を多く所蔵する等、滞在型の図書館にする特色を打ち出してはどうか。社会福祉、子育て支援のための曜日毎の相談窓口の開設はどうか。就労支援の仕事検索端末の設置はどうか。3階社会福祉協議会によるカフェや物品販売はどうか。といった内容だった。以上が、高川図書館の現状、来年度からのモデル事業予定、分館のあり方の報告である。

●委員長

今のお二方の報告について質問があればどうぞ。

●委員

高川図書館の貸出に関する数値と一般との比較はどうか？

●事務局

平日、子どもは学校で来られず、土日は親子連れで来館が多い。一日平均440人の内1割が子どもだと考えられる。高川図書館は利用者が思ったより少ないのではないかと考えている。

●委員

隣が小学校だが子どもの利用はかんばしくないということか。

●事務局

統計としては0～5歳が2.4%。6～8歳3.8%。9～11歳4.6%。全体の1割弱。

●委員長

小学生については授業終了後一旦、直接帰宅が原則か？

●委員

学校の指示でまず家に帰りましょう、こう指導している。

●委員長

隣にあるから寄る、というのは駄目なのか。

●委員

私から提案したいのは、授業の一環としてクラスで図書館に行き調べ物をする事。学校図書館に比べて何倍もの豊富な資料を所蔵している公共図書館を、児童が学校から行って自由に調べものに使える、そのような考えを持っているが、実際、高川小学校ではどうだろうか？

●事務局

子どもの利用が少ないのは、一旦小学生は帰宅するという原則があるためと思われるが、毎年小学3年生は図書館見学があり高川図書館のことは知っているはずなのに、利用が少ないのは営業力不足もあ

と思う。今、高川図書館で授業するのはどうかという提案があり、実現できるかはともかく、図書館と学校は、フェンスの鍵の開放で公道に出ることなく往来可能なので、良いことではないかと思った。

●委員長

自由に往来できるというだけのことでないでしょうが、色んな難しいことをクリアしながら、学校側が授業の中で図書館に出かけることができる、そういう工夫がほしい。高川は図書館と小学校が隣接する羨ましい環境にあるので、図書館側からもよりアピールし、学校側の認識も改めていく中でそういうことが実現できないか。他には？

●委員

今の話で、学校図書館とその他の公共図書館の機能の違いの中で、学校図書館を活用しながら発展的な形で公共図書館の利用なら理解できるが、蔵書構成も違う中、今の話をどう考えたらいいのか、素朴な疑問がある。

●委員

そのまま子どもを連れていくだけではだめだろう。何を目的にするかで変わってくる。たとえば3年生の図書館見学の延長上にあると思うが、授業においての活用となると、蔵書構成からその時の課題によっても、事前の打ち合わせが必要になってくる。

●委員長

知り合いからの話だが、アメリカの現状は、学校図書館が生徒たちの目的によって各公共図書館の特性を考慮した上で色々な図書館を生徒たちに紹介する。それによって調べたい欲求が深まっていく。最終的には大学図書館のような専門的な場所も紹介する。アメリカにはそんなやり方がある。学校図書館の先には他の公共図書館が待っていて子ども達の好奇心に応える、色々な図書館で調べる体験ができる、そういった意味では高川図書館と高川小学校は有利である、そう考えられるだろう。

●委員

図書館は基本的に椅子・机が少なくて机にもここでは自習ができませんと書いてあって、利用者、特に子どもがゆっくり図鑑などを見たいときに少し不便である。その辺りをどう考えておられるのか？

●事務局

その問題は夏休みに特に多く発生しており、今年の夏は試行として高川図書館の映画視聴スペース「ブラリアン」を開放したところ多くの子ども達の利用があった。試行でありアピールはしなかったため、千里図書館まで行って自習できなかったという保護者からPR不足である、実際に子どもたちが不便にあっているとの指摘を受けた。南部地域には自宅でゆっくり学習するスペースをとれない子どもをもつ家庭が多いときいており、南部地域での学習スペースの確保、開放の必要性を感じている。南部コラボセンター構想のサテライトの前倒しと共に高川図書館の多機能化、静かな場所から賑やかな場所まで、ワンフロアの中での区切り方、机椅子ももっと多く確保を考えていかなければならないと考えて

いる。

●委員

赤ちゃん連れや小さいお子さんのスペースにはソファが少ない。親子が座るにはあまりにも小さい。もう少し大きければもっとくつろげるのに、と思う。

●事務局

ソファは確かにご指摘の通り、改善したいと思う。従来、図書館の業務が、滞在型というより貸出中心だったので、その辺りを改め対応していきたい。

●委員長

サテライト化にあたっては施設面の充実が必要。試行錯誤を繰り返しながら充実させていく。高川図書館はスペースがすっきりしているので柔軟性をもった対応は可能だと思う。

●委員

少子高齢化の中で利用者増を目指すなら高齢者を念頭におくべきではないか。図書館サービスの対象の重きをそちらにおくべきではないか。

●委員長

先ほどの人口動態を見ればあきらか。最近の傾向は明らかに60代以上の利用者が目に付く。ただ人口構成比率と図書館利用者の年齢構成を考えると高齢者の利用には開拓の余地がまだまだある。ただ、実際に図書館にいた経験からいうと高齢者と一くくりにはできない。また、男性と女性ではニーズが違う。ここの高齢者への細やかなサービスが必要ではないか。ある意味、子どもたちより難しいと思う。事務局の高齢者への考え方はどのようなものか？

●事務局

実はランドデザインでターゲットにしているのは、30代～40代と60代以降。現状の利用者の4割に当たりこれらの年代対象の催し、医療やビジネス関連では実際に幅広い年齢層の方々に来ていただいている。特にこの高川の催す映画会などは非常に人気があり、豊中全域の住民の方々に来ていただいている。高川図書館の貸出冊数は北部に比べ明らかに少ないが、滞在時間が長い。そちらも大切に考えながらも、しかし南部地域には看過できない課題がある。南部コラボ構想では、そういった南部地域に顕著な少子化に伴う、子どもたちの学習支援、その保護者世代への子育て支援に対し、地域活性化の観点から重きを置いている。それらを踏まえて、映画会を催している会場を開放し学生ボランティアやコーディネーターに学習支援をしていただく。書架を少し圧縮しスペースをとって放課後や土日に家でゲームをしている子どもたちに来てもらい、学習支援はもちろん、話し相手となる。図書館としてランドデザインと共にこういった地域課題に取り組んでいきたいと考えている。この両立については逆に委員の皆様から意見をいただきたい。高齢者についてはご本人の健康状態によってこちらのサービス内容も変わる。直接来館できない方への宅配サービス、前期高齢者と後期高齢者でも当然サービス内容は変わって一筋縄ではないだろう。ただ、高川図書館では利用者の約3割が60代、庄内は4割、その認識は持っている。少子化や子どもたちの学力向上という地域課題と、高齢者へのサービスの細やかな充

実も両立させるにはどうしていくのが良いか、委員の方々にご意見をいただけたらと考えている。

●委員

自分もその世代だが、60代以上の方はどういう目的で図書館に来られているのか。幅広い分野を全体的に利用される方もおられるかもしれないが、ある程度焦点を絞って利用されている方も大分あるように思う。たとえば仏教の勉強をしてみたいという方もおられるだろうし、私もある程度絞って図書館を利用させてもらっている。豊中市のホームページで、所蔵する図書の検索はもちろん、そこでない場合は、いろんなところから、取り寄せてもらうことも可能で、そういう方は、限定した分野に絞ってじっくり向き合う考えでしょうから、やっぱり大切にしていきたい。たとえば本は、参照やいろんな参考図書などいっぱい出てくるので、こういうことが載っているのだったらそれも読んでみたいと、広がっていく部分がある。そこで、我々がパソコンで検索できるのは豊中市の蔵書だと思うが、所蔵していないものも探してもらえれば非常にありがたい。

●委員長

実際相互貸借という形での、余所の図書館から取り寄せは、まだまだ多くの方に知られていない部分のようで、新聞でそんなことが載ったら、別の方がそれは図書館で相互貸借で取り寄せてくれるよ、と投書されたらしい、そういった意味ではかなり住民の方々に提供できているように思う。図書館がそういうサービスをするものだというのが、ごくごく当然のようになってきた。

●委員

私も高齢者へのサービスは大変重要と思っており、いろんなニーズがある中で男女問わず共通の話題と言えばやっぱり、健康医療の話と思われる。それに対してすでにそういうこともやっているという先ほどのお話だったが、高川に関しては、来る途中に結構大きい病院があり地図で見ると近所に他にも病院があるようなので、もう実施しているかもしれないが、そういう病院の中に図書館に行けば情報があるということがわかるポスターを貼るとか、病院の中で健康に関する何かをするときに図書館が本や情報を提供するとか、いろんな連携の仕方があるのではないのかと思う。

●委員

今、先生がおっしゃった、たまたま二日前の毎日新聞、図書館の人はご存じだと思うが、医療機関と図書館の連携で、長崎市の例で、医療機関が図書館の方に出向いて、市民の情報提供を助ける取り組みが掲載されていた。そこでは相談もしていて、なぜならインターネットの癌とかに対する治療に関する情報等が今はすごく錯綜していて、免疫療法等、疑問符がつくような情報に戸惑う人が多くて、きちっとした科学的根拠のあるものを図書館が資料として集めて提供することが必要だから。医療機関と連携して、癌講座を開催しているなどが、一昨日の新聞に載っていた。若い人だけでなく高齢者に対して、岡町は今医療の専門のコーナーがあるのでそこをどういうふうに充実させ、高川と連携させやっていくか、結構ニーズは高いような気がする。

●事務局

私も長崎の例を読ませていただいて、(委員の皆様は)豊中の例でもすでにご存じだと思うが、医療情報コーナーを岡町に設置するとともに、岡町だけではなく複数の館で、長崎は癌だけの講座だったが、癌だけでなく、認知症等いろんなテーマで講座を実施した。豊中病院のそれぞれの専門の認定看護師さ

んに来ていただいて、簡単に一時間ほどのお話をしていただいた後、個別相談みたいな形が定着しており、蛍池や、服部等、他の館でも実施した。来られるのはやはり結構高齢の方が多く、それなりのニーズがある。高川図書館については、高齢者が来られるのであれば、医療関連の本がもう少し充実してもいいと思う。近くにある小曽根病院の関係団体で精神障害者の支援をに取り組む「ループ」という団体がある。図書館の協働事業「しょうないREK」での活動がきっかけで「ループ」の機関誌「リンク」に各図書館の紹介記事を掲載していただいた。また今年も病院の方から続きをと言われたので、小さいコラム、今回は図書館サービスを、それこそ医療や予約制度、リクエストなどの内容を12か月各館で順番に提供しようと話を進めてきた。

ただ一方で個人的な感覚ではあるが、まだ、何かを調べに図書館に行く、図書館の人にこういうことを聞いていいのかわからず、書架にあるものを借りている気がする。

実は庄内の子ども室では子どもたちが遠慮してこんな本はどこにあるのかというのをなかなか聞けないようなので、実際に書誌情報を印字したものを新刊本のカバー前に貼って、それを持って「これ貸して」と言いやすいようにした。本に対して消極的なところがあるので、それもこの南部地域に関しては一つの課題と思う。

親御さん自身が子どもの頃、親に図書館に連れて行ってもらう機会が少ないような気がするというご意見もいただいたりしている。なにか目に訴える仕掛けをなにかしたうえで、図書館がそういう資料をもっていて、暮らしに実際に役に立つことを体感していただかないかぎりなかなか難しいだろう。

●委員長

健康医療情報サービスをやっている図書館。そこで聞いていると、図書館がというよりも地域の医療関係者と色々な議論をしていく中で医療関係者の方が、図書館を使ってそんなことが出来るのかと改めて図書館を見直してくれることが多いようだ。図書館が何もかも荷なっていく必要はなくて、そうした方々にいかに図書館をうまく使っていただけるのかという仕組みを作っていくのが、多分大事なだろう。そうした中で、より広がり、深みのあるものになっていくのではないかな。

●委員

いろいろ話を聞いていると、図書館はいろいろなニーズに応えなくてはいけないと思うし、人口なども今後大きく変わっていくことになるので、所謂マーケティング手法を導入するべきだと思う。どういった属性の人が住んでいるのか、「セグメンテーション」（*マーケティング用語で市場の属性を細かく分けること）というのだが、これも一般的な言い方で「クラスター分析」（*基本的なデータ解析手法のひとつ）をやって、その中でどういうことを手段としてやっていくか、アクションとしてやっていくかというのがプランだろう。そういう大きなマッピング（プランの位置づけ）をして、そのマーケティング手法でやっていくことが、大事だと思う。

●委員長

そういうマーケティングでやっていかないと、ニーズに合致したものにはならない。当然行政サービスにもマーケティングという考え方が求められていると思う。

それでは、時間もないので、ここで高川図書館については、ご意見いただいたという事で、次第の次に上がっている、工程表についてご意見をいただきたい。

これについては前回もいろんなご意見いただいたが、そう言ったご意見を組み込んで、新しく作り直しているのので、この工程表につきまして、事務局からご報告いただきたい。

●事務局

工程表についてご説明させていただく。

今会議の前に送付した事前資料の方とはそれほど変わっていない。前回第二回でいただいたご意見を少し反映する形で、修正・加筆をしている。

前回の委員の皆様からのご意見として、「優先順位が高いからといって、その事業がイコール重要というわけではない」、今は優先順位が低いとしても、重要度が高いものもあるという事で、それが「優先度＝重要度ではない」ことを明確にすること。

あるいは「せっかく見やすくするのであれば、色刷りにする」とか、「プランの開始から完了までをもう少しわかりやすくしてほしい」、あるいは、「未確定のところは表示もわかりやすく未確定とする」、などのご意見をいただき、たとえば色について優先的に取り組むものについては、緑色に着色した。

またフォーマット以外にも28のプランについても必要なものについては、特定の課題について取り組むためにもチームを組む編成などについてもご意見を前回いただいた。それはチーム・グループ制にもかかわってくると思われる。

表としては、より見やすくするために継続実施の部分にも点線を入れたり、矢印で継続状況を示す形にした。特定事業の見直しの平成32年度、目標年度に枠を入れているのは、それ以降については不特定な部分も多いという事であり、検証も行っているが継続あるいは休止といった形で、まだはっきりしないということで、破線のひし形になっている。この表については、各館の副館長及び分館の施設長が中心に内容の見直しをしているところで、そこからの意見もあり、変更している部分もある。たとえばセルフ貸出機の全館導入が33年度になっており、それは⑰のセルフ貸出しの返却や受取のことだと思うが、これはあくまで仮定の話ではあるが、例えばシステムリプレイスの平成30年の時に合わせるという考え方もありだろうという事で、一部アーチのように矢印が飛んでいる表現になっている。

このように前回見ていただいたときに加えてシステムリプレイス等、なるべく具体的な記述を入れ、実際にこの工程でいいのかも含めて、分館施設長や副館長による確認を行っている。現在分館の在り方などについては、行政総務と共に調整中の事項もあり、未確定な部分を残している。

さらには委員長・副委員長からいただいたご意見で、まだ十分反映できていない部分もある。副委員長からは、「工程表には、28ものプランがあるがもう少し縦の動きもあってもいいのではないか」というご意見や、震災関連でやる時の工程とこういうものは少し違うけども、現場で作られる工程表では、建築とか人の動きとか、お金とか、ひとまとめにして表現するという事を、ご助言としていただいている。委員長からもいろんなご意見をいただいたが、まだ十分に反映できていないのでもう少しお時間をいただいて、手を入れていきたいと思う。

関係性のあるプランを繋ぐということで、⑤の職員の役割分担というところでは、役割分担が完結してから、グループ制を導入して、そして最後に採用企画になるといった、それぞれの縦のグループの動きを確認した方がいいのではないかとご意見をいただいた。今後の予定としては、再度工程表と内容のフォーマットについて館内で調整し、市民の皆様に見ていただける形にした上で公開に向けて進めていく予定。

●委員長

この工程表については、先ほどお話したように、まだ未確定な部分もあるが、フォーマットの棧という事で、示していただいた。そのことを前提にして、ご意見ご質問はあるか？

●委員

返却貸出が自動化されるに伴って、いろんな問題が現場で起こるだろうし、その辺りをどういう風に乗り越えるのかという事が、一つ大きな課題だと思うが、私たち図書館に関わる活動をしてきた人間としては、いくら自動化が進んでも、やはり人と本をつなぐという根本的な役割が、本当に果たしているかどうかというところに立ち返って、その効果検証をしていただきたい。自動化に関するいろいろなことを決める時に、図書館の現場をあまりご存じない方が知らないままで決めていくようなことがないよう、図書館からもきちんとそういう説明ができるような体制を常にとっていただきたいと思う。

●事務局

基本的には、前回の協議会でもご意見等いただいたが、あたたかい図書館、無人化によって冷たいのではなく、その両立は常にこれからも図っていききたい。フロアについても尽力していくという基本的スタンスは全然かわっていない。

●事務局

本日の配布資料に、「貸出返却がかわります」のチラシがあるが、今の話題と直結するので、ここでご報告させていただきたい。

ちょうど1月の末から3月の初めにかけて、順に市内図書館資料点検のお休みをいただいているが、その期間中に今回は、自動化の導入についても実施している。今年度については、千里図書館に自動貸出機セルフ貸出機・自動返却機、予約のE棚。その三種類を設置という事で進めている。そして、野畑図書館には自動貸出機と自動返却機、岡町図書館には自動貸出機のみという事で、3つ図書館それぞれに導入する、仕組みの種類は違う。違うが今年度末にはその仕組みを稼働させた形でやっついこうと、ただ今、準備進行中という段階になっている。

そこで職員の動き方というのが、とても大きく変わってくると考えている。市民に役立つと実感していただける図書館、これまで調べ物をしにきても本が見つからないからそこで何も声を発さずに諦めておられた方とか、そういう方にこちらから積極的にお声をかけたりすることで、より一層図書館が役に立つという事を感じていただける、そういう機会をたくさん作る場所に人の手をかける、そういう取り組みの方向を目指して現在進んでいる。

●委員長

効果検証では、何をもって効果があったとするのかというところが非常に難しいところだろう。私は選択肢が増えるのはいいことだと思っていて、決して自動貸出機は非人間的だと非難するつもりはなくただ、効果が、自動貸出機の割合が100パーセントになって始めて大きな効果があるというにはならないでほしい。その辺りで評価をどうするか。そういった意味ではフロアで図書館の職員の方々の方が今までより、利用者の動きに注目する、セルフ予約棚は環境によっては24時間貸出しが可能で図書館が閉館しても自分の好きな時間に貸出しが出来るので、利用者によってより有効なものとなるだろう。だけど、そのすべてを自動貸出に出来るのは利用者にとって有効なものではないはず。なので、その辺り

も効果の検証のポイントとしてぜひ工夫しながらやっていただきたい。

●委員

工程表に関して、先ほどの私の意見に絡んでくるが、この調査分析は調査分析が目的じゃなくてサービスを向上させるためにはどうすればいいかのための調査。この工程表においてはいろいろとAからHまで有機的に関連していくから意味があると思われる。広報の場合も、ある程度、調査の是非をしないと、効果的かどうかわからない。だから、Dの部分はある意味ブレインみたいなもので、ここがそれぞれと有機的に関連していくことがすごく重要と感じた。

●委員長

多分ここで具体的にどういった調査をここまでやって、どこに反映させていけるかを、この項目の中に書くともう少し見えてくるのではないか、たとえば高齢者サービス、高齢者のニーズの調査分析をたとえば27年度までにきちんとやって、この中のどこにどう反映させていけるかを加えて関係として見えてくれば非常にわかりやすい。市民にとっても図書館はこういった形でサービスをより充実していこうとしているということが、将来、時系列の中で見えてくるだろうという意味合い。

だんだんと注文がむずかしくなってくるばかりで図書館の方には益々頭しばって汗かいていかなきゃいけなくなってきたが、これが多分市民の方々にとっていいサービスとして跳ね返っていくものだと思うので、もう一汗かいてくださるようお願いする。

という事でここまで、議題に予定していた項目2つに沿って進めてきた。そのほかに事務局から報告があればお願いします。

●事務局

報告案件が2点ある。

まず1点目として、お手元にある「豊中市子ども読書活動推進計画第2期実施計画評価報告書」、子ども読書活動推進計画の今後について、少しご報告させていただきたい。豊中市は、すべての子どもが豊かな読書の経験を通じて健やかに成長していくために、図書館をはじめ地域や家庭、学校、あるいは公共施設などの様々な場所で子どもが本や読書に親しめるというような取り組みを進めるために、平成17年に「豊中市子ども読書活動推進計画」を、翌年の18年にはその理念を踏まえて「豊中市子ども読書活動推進計画実施計画」を作成し、その間の評価や課題を見据えて、平成22年には「豊中市子ども読書活動推進計画」が「第2期実施計画」に進んできた。それから5年たった今年度、第2期実施計画の5年間継続の総括を行ったのがお手元の評価報告書である。

第2期のアンケート調査の結果によると、読書が好き、あるいは読んでもらうことが好きと答えた子どもや、家庭で本の話をする子どもの数が、第1期と比べて増えている。また、学校図書館の利用についても増加傾向が見られる。第1期の課題として挙げられていた、小学校中学年から中学校にかけての読書離れについては、第2期実施計画を終了する現在、生活の中で読書を楽しむ子どもたちの様子が伺えるという分析も載せている。こういった様々な事例から、子どもの読書への関心の広がりを実感できるという報告が寄せられており、これも市の子どもの読書活動の推進の成果と考えられている。

子ども読書活動推進計画の今後について課題はあるものの、現在、豊中市の子どもの読書活動の取り組みは、府内において先進事例とされ、国が平成25年5月に示した「第3次子ども読書活動の推進に関する基本的な計画」の達成目標の内容については、本市においては、すでに実践されている状況であり、第

3期の目標を実施計画で立案する必要はないものの、こども未来部が中心になって策定を進めている子育て・子育て支援行動計画に、子ども読書活動推進計画の理念を盛り込むことで、子どもの読書環境を整える取組みを、全市的、多角的に進めてまいりたいと考えている。

ただし、実施計画は終了するものの、一方で、各団体や施設、行政部局が行っている現在の取り組みを、今後も実施し見直すことや、評価報告書に示されている分野別の取り組みなど、子ども読書環境を支えるための現状の確認を今後も継続して行うしくみづくりにも取り組んでいく。

2点目は、先ほども委員長がおっしゃったが、今回で平成26年度最後の図書館協議会となった。次期の図書館協議会の議案としてはこれまで図書館が行ってきた子ども読書活動や障害者サービスの市民協働とは別に、個人として図書館で自分の持ち味を発揮して、そのことがコミュニティづくりに繋がるようなサポーター制度、図書館サポーター制度の在り方についてご議論いただければと考えている。

●委員長

評価報告書の出た子ども読書推進計画、次期のテーマについて。ご質問とかご意見は？

●委員

豊中市子ども読書推進計画。第一期の評価報告書のときも、この10年間で豊中の歴史的経過ももちろん踏まえて、とてもよくやってくられたと思うし、内容を読むのをすごく楽しみにしているが、今、言われた子育て・子育て支援行動計画、ここに理念を入れていくことが大切。たとえば教育振興計画、子育て子育て行動計画、子ども育み条例。いろいろな市民意見公募があつて、キャッチする私たちの方もズレがあつたこともあるが、どうしても理念が活かされているとは思えない。そしてパブリックコメントを出す段階で、図書館に関わる市民活動の責任として、文章を細かく検討していくのだが、そうするとこういう条例とか行動計画出てきたときに図書館はちゃんと自分たちのミッションをアピールしているのかと、いつも疑問に感じる。図書館として、生涯学習という重要な位置にあるのに、徐々に改善されつつあるとはいえ、それがきちんと行政の中でも、あるいは市民の中でも認識されているかという、やはり十分ではない。その結果がこういう案になって、計画案とか、条例案とか出てきたときに、もろに出てくる。その辺りにすごく危惧を感じるので、しっかり行政の中でも市民に向けても、図書館というのはこういう役割をしているのだ、と、すでに図書館のグランドデザインにきちんと書き込んでいるのだから、それをこういう計画や条例の中で活かす努力を図書館の職員の方はもちろん、行政のかたにももう少しきちんと反映させていただきたい。理念の一貫性が出てこないで市民がパブリックコメントとして出すと、どうしても少しチグハグになってしまう。もっとしっかり理念が押さえられていたら、きっと条例とか計画案に一貫したものが流れるに違いないのにそれが感じられず、毎回とても不満。わざわざ誇張して入れるのではなくて、すでに行政としての文章として出ている。それをちゃんと検証する努力をもっと図書館の人も含めてやっていただきたい。理念を本当に活かしていただきたい。10年間関わってきてたくさんの市民の方や、子どもに関わる行政の施設とか社会教育施設も含めてその人たちの努力がきちんと報いられるような姿勢でやっていただきたい。

●委員長

今のご発言について、私は、図書館はもっと今やっていることを自分たちで自信をもって主張しなさいという、励ましたと、そう受け取っている。実際に今やっていることに、本当に自信をもって図書

館が主張する事はすごく大切だし、そうした仕事を実際にやってこられたという事を踏まえてのことだ
とお聞きしているので、ぜひよろしく願います。

それでは議題についてはそこまでしておきたい。

今回の協議会が現在の委員さんによる最後の委員会となった。この中で、おふた方とも今回が最後と
いう事になるので、他の委員に対して励ましも含めてご挨拶いただきたい。

●委員

私もこの2年間、回数は少なかったが、いろんなご意見お聞きして思うことは、図書館自体がやっぱ
りいろんな市民を巻き込んで、市民の、いわゆる人生、ライフステージ、そういうものをバックアップ
していけるような体制になれば、非常に市民自体も喜ぶし、それがまた図書館が発展していくことにな
ると思うので、そういう方向で一人一人の人生、それから幸福感、その人の肯定感。そういうものを高
められるような基礎が出来ていけば非常にいいとそういうふうに思う。委員の方々がそれをバック
アップしてくださったら、非常にいいと思う。

●委員長

ただいまの委員のお話をお聞きして、本当に図書館への愛情をお持ちなのだと感じた。これからも豊
中の図書館を様々な形でバックアップしていただければ非常にうれしくおもう。こういった場ではなく
ても、いろんな気が付いたことおっしゃっていただければ図書館も助かると思う。

次の委員は先2005年から10年間という事で今回任期満了という事になり、本日最後となる。1
0年間という事で非常に長く委員として関わっていただいた。一言どうぞ。

●委員

2005年からという事で、どんなことをやっていたのだろうと、この間、資料をおこしてしました
ら、ちょうどその年に学校司書全校配置完了というようなチラシが入っていたり、評価システムの検討
をその時期にスタート。新千里の図書館検討も始まった。というようなことで、ちょうど私が関わっ
てからこの10年間というのは新しいことに豊中の図書館が取り組まれてきた…ちょうどそのスタート
の時に関わらせていただいたことを幸せに思っている。その中でも特に外部評価に多くかかわらせてい
ただき、その中で、図書館の中もそうだし、私自身も豊中の図書館のいいところ、もう少し改善した方
がいいところも明確に見えてきた部分があったのではないかとこのように感じている。今回出されたグ
ランドデザインも、それからこれからの南部コラボの計画なども、そうしたものを踏まえて新しいスタ
ートであるというふうに考えている。これまで以上に図書館を取り巻く社会的な環境も厳しくなって、
技術的にも新しいものにも立ち向かわなければいけない。その中で、特に専任のスタッフの方々には公
共だから出来ること、公共でしかできないこと。専任職員だから出来ること、そういうことを意識しな
がら引っ張っていただきたい。豊中の図書館は本当に素晴らしい。地域の方々と連携されて最近は本当
に自らいろんなところに出かけて、ニーズの掘り起しをされているところも素晴らしいと思うので、そ
ういうところを伸ばしていただけたらと願っている。ありがとうございました。

●委員長

非常に長い間ご苦勞さまでございました。

とはいえ、まだまだこれからも豊中の図書館には十分に関わっていただきたい。私も個人的には先生には教えていただくこと、相談させていただくこと多々あると思う

●委員

委員長、私も今回が最後となるので一言申し上げたい。

いっぱいいろいろ言っているのは、本当にエールとして。先ほども言いたかったことが、もう一つある。グランドデザイン等も図書館が何もかもしようとする。だから支援するという言葉がすごく多いが、実際に豊中市には基本条例もあるし、市民活動推進条例もあるし、なにより第三次総合計画に協働とパートナーシップに基づくまちづくりの推進と、はっきりと明確に書かれており、先ほどの子ども読書活動推進計画でも、市民の力の果たしたところはすごく大きいと思う。その辺りの協働することを大切にしていきたい。図書館ばかりが支援するのではなくて、実際に則した支援する支援されるという協働、あるいは一緒に何かに取り組むという。協働精神をもっと活かしていきたい。

実は先日豊中文庫連絡会も会員となっている、大阪府子ども文庫連絡会の講座で、そこで、現場を見ながら熱心に取り組まれている大源教育長と、そこにいらっしゃる子ども読書活動推進計画連絡協議会の委員長をしていた安達さんが豊中の学校図書館について話された。お二人の話にすごく感動したが、そういう大事なものを図書館の方も頑張ってさらに育てていただきたいと思う。どうもありがとうございました。

●委員長

お辞めになることを全然知らなかったもので、ちょっと動揺しておりますが、本当に私もいろんなことを教えていただいて、これからもいろんなことでお付き合いいただけたらと思う。立場は離れますから、もっと直接にエールをいただけたらと思うので、ぜひ職員の方々厳しく励まされたい。

それでは以上をもって平成26年度第3回豊中市図書館協議会を閉会する。